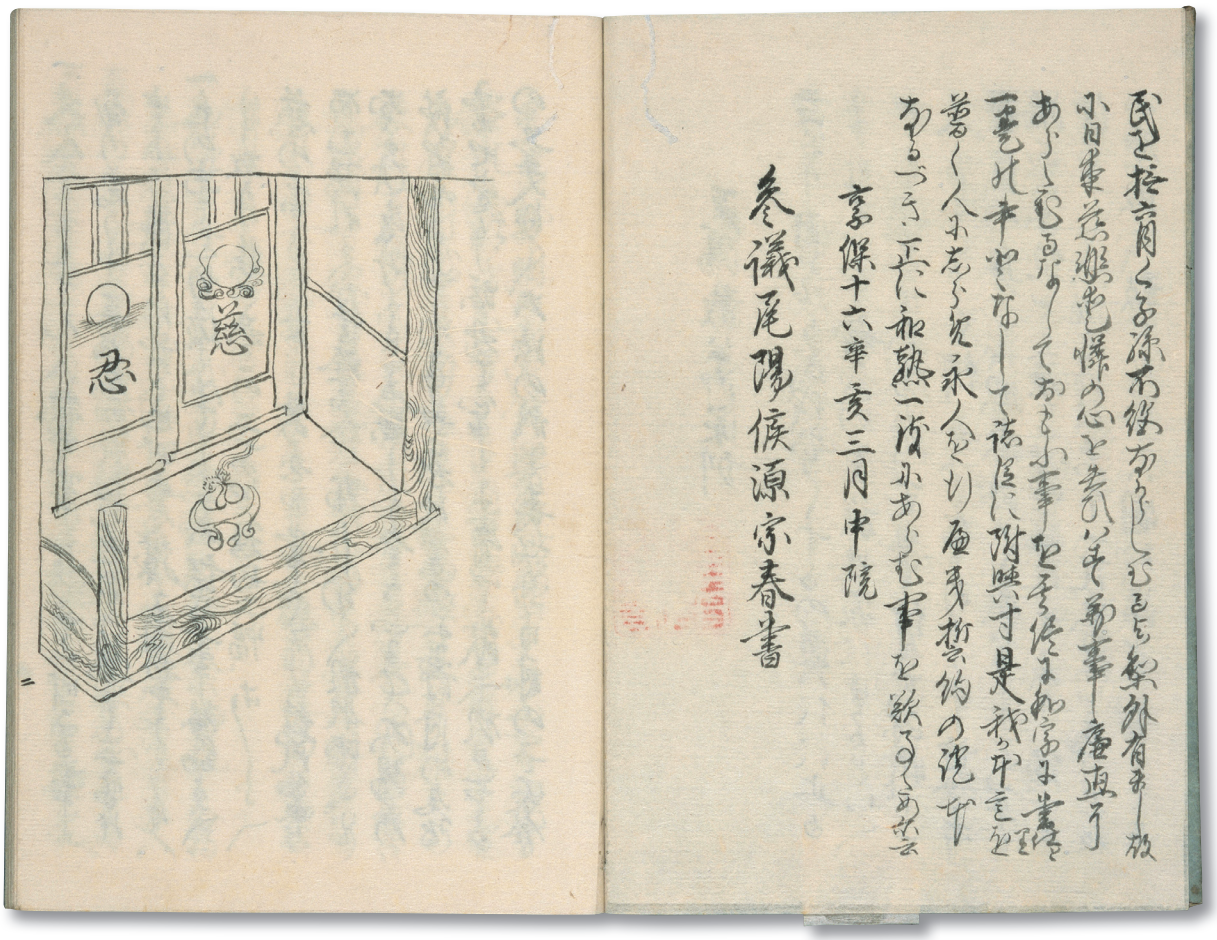
# 蓬左

HÔSA




尾陽戴公御家訓（温知政要）

春季特別展
歿後二五〇年記念

# 徳川宗春

尾張徳川家七代宗春（一六九六～一七六四）は歴代藩主の中で最も有名で人気の高い殿さまです。三代綱誠（つなのぶ）の二十男として誕生し、二十四才で、奥州簗川（やながわ）三万石の大名となりますが、翌年には兄である六代継友が跡継ぎが無いまま歿したため、享保十五年（一七三〇）、尾張家の家督を継ぐこととなりました。

宗春は、八代将軍吉宗が推進した享保の改革に真っ向から反対し、積極的な経済政策や開放的な文化政策によって名古屋に、江戸や大坂をしのぐ空前のにぎわいを呼び込みました。全国から有力店舗の出店が相次ぎ、遊郭や芝居小屋が活気づく一方で、風俗の悪化や藩財政の破綻が始まり積極政策の転換を余儀なくされました。この機に、危機感を募らせた竹腰等の重臣と結んだ幕府によって、隠居・謹慎を命じられ、二十五年におよぶ幽閉生活のままその生涯を閉じました。

稀代の名君か、はたまた異端の暗君か。宗春の治世についての評価は大きくわかれます。けれど名古屋にもたらした一時の夢のような希有の繁栄は、その後の名古屋の経済、文化発展の基礎を築くこととなったには違いありません。

これまで宗春一人をとりあげた展覧会はありませんでした。本展では歿後二五〇年を記念し、まとまって紹介されることのなかった尾張徳川家に遺されたゆかりの品々を一堂に会し、数奇な運命をたどった異端の尾張藩主の生涯をたどります。



有馬則維書状（ありまのりふさしょじょう）　松平摂津守（義行）宛
宝永6年（1709）3月29日　徳川美術館蔵

筑後国久留米藩主有馬則維（1674～1738）から尾張徳川家の分家高須藩松平義行（1656～1715）に宛てて、部屋住みであった14才の万五郎（宗春）の仮養子を願った書状。ただし、翌年に則維に男子が誕生したため、万五郎（宗春）が本養子となることはなかった。この度この書状の発見によりはじめて有馬家からの養子願いの事実が確認された。初公開。



けいせい妻恋桜（つまこいざくら）　一冊
江戸時代　19世紀　徳川林政史研究所蔵

宗春をモデルにした芝居「傾城妻恋桜（けいせいつまこいざくら）」の絵入り番付（プログラム）の表紙絵である。ここに描かれた長キセルをくわえて牛に乗った宗春に扮した歌舞伎役者の姿は、記録に残る奇抜な衣装を好んだ宗春の姿を再現しており、肖像画が確認されていない宗春像として語られることが多い。

展示室1

# 尾張徳川家の若君・姫君

江戸時代の大名家では、子どもたちの無事の成長を願って、節目に宮参りや髪置・着袴など、数々の通過儀礼が執り行われました。また、子どもたちには、成長するに従い、大名家の名にふさわしい教養や学問を身につけることが求められました。

江戸時代には「家」の存続が重視され、今では考えられないような年齢で家督を継ぎ、縁組・婚姻を行った例が少なくありません。尾張徳川家の歴代では、初代義直は数え八歳、四代吉通は十一歳、五代五郎太は三歳、十代斉朝は八歳、十一代斉温は九歳、十三代慶臧は十歳で、御三家筆頭の尾張徳川家の当主となりました。また、国宝「初音の調度」で知られる三代将軍家光の娘・千代姫は、わずか三歳で尾張徳川家に嫁ぎました。なかでも、五代五郎太・十三代慶臧は、家督を継いで数年のうちに亡くなったため、身近に親しんだ玩具までもが遺されており、その日常生活がうかがえる点で貴重です。

無事に成長することを願って行われた通過儀礼の数々と、幼くして尾張徳川家の「顔」となったがゆえに遺された子供時代の道具や史料などを通して、大名家の若君・姫君の暮らしや学び、遊びを紹介します。



花色地蔓葵紋付子持筋熨斗目
江戸時代　17世紀　徳川吉通（尾張家四代）着用
徳川美術館蔵

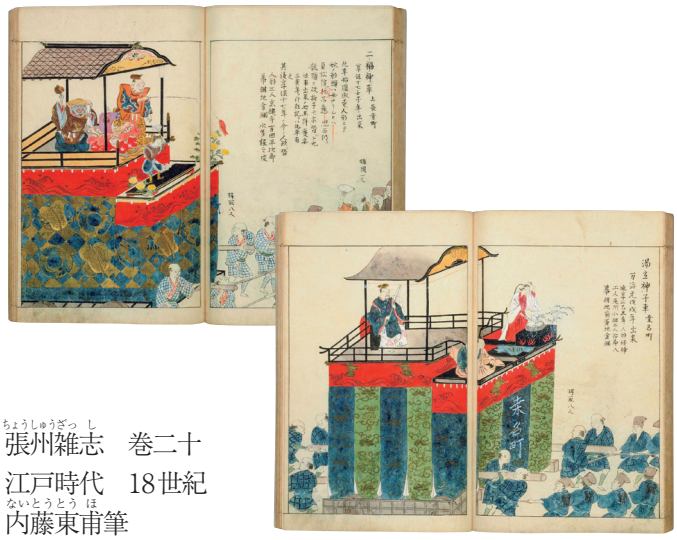


洋犬玩具　江戸時代　18世紀
徳川五郎太（尾張家五代）遺品
建中寺蔵

展示室2

# 名古屋まつりと山車揃え

昭和三十年（一九五五）に始まった「名古屋まつり」は今年で第六十回を迎えます（今年は十月十八日、十九日）。郷土英傑行列で有名な名古屋まつりですが、初期には産業振興を目的にした展示会が行われるなど、時代とともにその在り方は変化してきました。また、徳川園山車揃え（六月八日）に登場する東区の山車も含む、市内の山車九輌が集まり、伝統的な祭礼の要素も取り入れられています。名古屋まつり六十年の歩みを振り返るとともに、名古屋のまつりを彩る山車を紹介します。



張州雑志　巻二十
江戸時代　18世紀
内藤東甫筆

尾張藩士の内藤東甫が編さんした絵入り地誌。名古屋東照宮祭礼の様子を詳細に描いている。毎年4月の東照宮祭礼では、9輌の山車が揃う壮麗な行列が本町通りを練り歩いた。これらの山車は空襲で焼失したが、名古屋まつりでは東区・中村区などから9輌の山車が揃い、往時の祭礼行列をしのばせている。

蓬左文庫・徳川園新装オープン一〇周年記念

# 大曽根御殿と徳川光友

徳川美術館・名古屋市蓬左文庫がある徳川園の地には、かつて尾張家二代光友（一六二五～一七〇〇）の隠居御殿である大曽根御屋敷が設けられていました。元禄六年（一六九三）に家督を嫡男の綱誠（一六五二～九九）に譲った光友は、翌七年三月十八日に新たに造営した大曽根御屋敷に移り、亡くなるまでこの地で過ごしました。一方でこの場所は、光友が誕生した場所でもあり、光友の胞衣（胎盤）を埋めたという場所が、徳川園黒門西の道路中央に現在でも残っています。

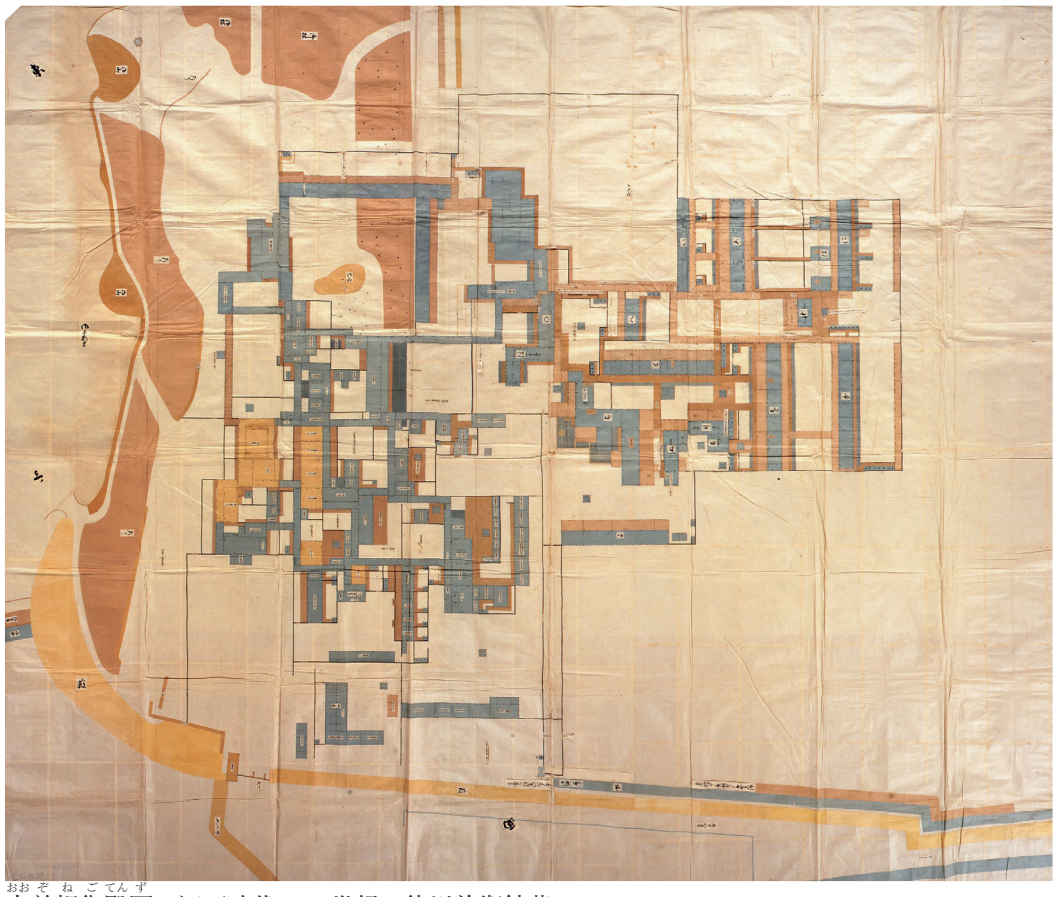
屋敷は南北約七百メートル・東西の最大幅約一キロメートル・約十三万坪の規模を誇り、崖下には十六挺立の船を浮かべた巨大な池泉が存在していました。光友歿後は、成瀬・石河・渡辺の重臣三家の屋敷や、町屋に分割されましたが、明治維新後に再び尾張家の所有となり、大曽根邸が設けられました。

光友は、初代義直（一六〇〇～五〇）の唯一の男子です。寛永十六年（一六三九）に三代将軍家光の長女・千代姫（一六三七～九八）と婚礼した際に用意された絢爛豪華な国宝・初音の調度は、現在でも徳川美術館に伝えられています。光友は、慶安三年（一六五〇）に義直が歿した後、二十六歳で家督を継ぎ、尾張藩政の確立と名古屋城下の整備に尽力しました。

この展覧会では、徳川美術館に伝えられた光友の遺品を中心に、光友の生涯をたどるとともに、光友が営み、光友の死とともにわずか五年で役割を終えた巨大御殿・大曽根御屋敷の実態を紹介します。



四十六間筋錆塗兜　徳川光友着用
江戸時代　17世紀　徳川美術館蔵



大曽根御殿図　江戸時代　17世紀　徳川美術館蔵

展示室1

# 墨の美術―黒の世界―

墨は、絵をあらわし、また詩文を書くために用いられてきました。永きにわたって書画に遺りつづける墨からは、文雅に生きた人々の理想とした世界や彼らの個性、愉快な交友を読みとることができます。

墨の色は、一見したところ黒一色ですが、その濃淡と筆勢によって、さまざまな表現が可能です。中国の水墨画の始祖とされる殷仲容が、「墨は五彩（赤・青・黄・白・黒）を兼ねる」と述べたように、黒という色は単色でありながら、かえって様々な色彩をイメージさせます。

宮本武蔵による「蘆葉達磨図」を見てみましょう。蘆の葉に乗って揚子江を渡る達磨は、筆数を減らしつつもたっぷりとした描線で描かれ、重厚感を込めてあらわされています。また、水面はゆるやかな淡墨であらわされ光をたたえ、軽やかな筆致の蘆は風をからませ揺れるようです。わずかな筆数とその筆致の違いにより対象に迫った本作品には、墨による表現の奥深さを見ることができます。

本展では、徳川美術館所蔵の書画を中心とした作品から、人々の墨にまつわる営みと、墨によってあらわされる清雅な世界を紹介します。



宮本武蔵筆　蘆葉達磨図　江戸時代　十七世紀
徳川美術館蔵



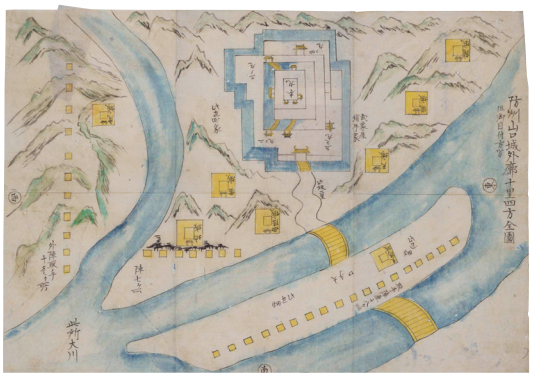
青窓紀聞　江戸時代　19世紀

尾張藩陪臣の水野正信が記した風聞書。第一次長州征伐に従軍した水野はこの間の様子も詳しく記している。写真は遠征途上で見た兵庫港。

展示室2

# 第一次長州征伐と尾張藩

文久三年（一八六三）八月十八日、尊王攘夷派の七人の公卿と長州藩は、公武合体派の薩摩・会津藩によって京都から追放されました。翌元治元年、政権奪還を狙って京都に押し寄せた長州藩兵は薩摩・会津藩らの前に敗退、幕府は前尾張藩主の徳川慶勝を総督に任命し長州征伐の兵を起こします。この展示では蓬左文庫に残された史料から、第一次長州征伐に至る幕末の動乱をたどり、従軍した尾張藩士の記録などから遠征の実態を探ります。



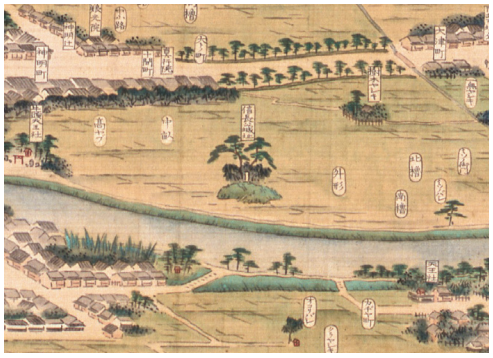
防州山口城外廓十里四方全図　江戸時代　19世紀

第一次長州征伐の際に作製されたと思われる山口城の絵図。文久3年、藩論を破約攘夷に転換した長州藩は、外国船からの砲撃を逃れるため政治拠点を萩城から内陸の山口城に移した。

## 『尾張名所図会』と「清須総図」

去る二月十一日まで開催した企画展「名所図会の世界」では、幕末から明治初頭に編さんされた『尾張名所図会』に関わる資料を紹介した。そのなかで写真の「清須総図」（個人蔵）という作品を展示した。これは『尾張名所図会』の挿絵を担当した尾張藩士・小田切春江（一八一〇～八八）が描いた肉筆彩色画である。

この絵は『尾張名所図会』後編（一八八〇年刊）に掲載された挿絵と同じ構図で清須の町並みを描いており、その関連は一見して明らかであるが、よく観察すると両者には違いもみられる。例えば『尾張名所図会』掲載の挿絵における清須城址を見てみると、塚の上に松林が描かれ、「城址」とだけ注記されている。一方で、「清須総図」を見ると松の間に石碑が見え、注記は「信長公城址」となっている。この違いは板木に刻めなかった細かい情報を描き加えただけのことかもしれないが、春江が清須城址を「信長公城址」と認識していたことがわかり興味深い。



清須総図（部分）　個人蔵
小田切春江筆

というのも、「清須城＝信長の城」という認識は、近世には必ずしも一般的ではなかったからである。例えば、春江が付図を製作した藩撰地誌『尾張志』（一八四四年）は、清須城址を「斯波武衛家居城ノ跡」＝最初に城を築いた斯波氏の居城とし、信長については全く触れていない。

では、「清須城＝信長の城」という認識は、どこから広まったのか。これには幕末における清須の有力者・文人による信長顕彰の動きが関わっている。弘化四・五年（一八四七・四八）ころ、清須で酒造を営み村政を主導した武田晨業が清須城址に「右大臣織田信長公古城跡」と刻んだ石碑を建立した。さらに文久二年（一八六二）、清須宿本陣役の林恪が同地に「清洲城墟碑」を建立、清須を信長の「覇業開創之地」と位置づけた。春江が清須城址を「信長公城址」としたのも、おそらくこうした地元での信長顕彰を受けてのことだろう。実際、春江は林から「清洲城墟碑」碑銘と清須城古瓦拓本の提供を受けて「名所図会」に掲載している。こうした交流を通して、信長顕彰の動きにも理解を深めていったと考えられる。

実は、春江が名所図会の挿絵と同じ構図の彩色画を描いた事例は他にも存在する。展覧会にも出品した「蚕種由来附三輪系譜」（個人蔵）と題された史料である。これは「名所図会」の挿絵と同じ構図で、周辺地域に養蚕を広めたという三輪家の邸宅を中心に葉栗郡宮田村の景観を描き、家系図を添えて当主の三輪貞二に贈ったものである。貞二は「名所図会」調査にも協力し、しばしば春江に絵を注文していた。「蚕種由来附三輪系譜」はこうした交流のなかで製作されたものである。これを踏まえると、「清須総図」製作の背景にも、清須における有力な協力者の存在を想定できるのではないだろうか。

こうした経緯からは『尾張名所図会』編さんの重要な特質が浮かび上がる。すなわち、清須における信長顕彰、あるいは宮田村における養蚕と三輪家の関係のようなローカルな由緒・歴史意識を、現地調査を経て「尾張国」の地誌叙述に組み込んでいく方法である。そうした調査には、地域文化の担い手たる各地の有力者（文人）による協力が不可欠であった。「清須総図」は清須の景観を描いた優れた絵画であると同時に、「名所図会」編さんの特質を物語る貴重な史料でもある。

（学芸員　木村慎平）

※参考文献
・名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室『尾張の古都　清洲と濃尾地域』（二〇一〇年）
・江南市史編さん委員会『江南市史』（江南市、二〇〇一年）

## 也有と宗春 交錯する人生

尾張藩主の人気ナンバーワンといえば宗春だろうか。宗春は元禄九年（一六九六）に生まれる。その六年後の元禄十五年、藩の重臣で千石以上衆の横井孫右衛門家に嗣子が誕生する。孫右衛門時般、也有の俳号で知られた文化人でもある。也有は、享保十二年家督を継ぎ、享保十五年（一七三〇）に御用人となる。同じ年の十一月、宗春は七代藩主を継ぐ。江戸詰にあった也有は宗春の封襲御礼に随行し、二人の人生がここで初めて交錯する。

『名古屋市史 人物編』に「也有用人たる時、藩主宗春に扈従して江戸に至る。途大井川を越ゆるに際し、日暮雨来る。衆先を争ひて騒擾す。宗春之を見て急に也有を召し命じて之を鎮めしむ。也有径ちに馬を進め、衆中に入りて縦横に馳突し、忽ち部伍を整へ、順次に川を渉らしめ事無きを得たり。是れ蓋し謙信流の軍法に基くといふ。人其兵馬に老ゆるを称す。」との記事をひく。参勤交代の大井川徒渉で混乱する家臣を鎮めるように命じられた也有は、馬を川に乗りいれ走り回る。馬に蹴られて溺れ死ぬのはかなわんと混乱が収まったという逸話である。その手法は謙信流の軍法というが、也有一流の冗談ではなかろうか。祖父時英、父時衡の薫陶をうけ、也有は幼少から文武の道を究めていたようである。ところでこの逸話には間違いがある。野田千平・山本祐子両氏の研究*によれば、宗春の参勤交代に也有が付随した様子はない。也有は宗春には冷遇されたらしい。

人間万事塞翁が馬、冷遇の期間は芭蕉の著作の書写に費やせたのだ。水戸公から、尾張藩には芸術に優れた藩士がいるのかと尋ねられた戴公（宗勝）は、「芸ニ達したると迄ハ申されず候へ共、内藤浅右衛門号東甫と申者画をかき、横井孫右衛門号也有と申者俳偕をいたし候が、両人とも中々出来申候」『天保会記 十』と、藩主にも認められていたようだ。

也有の俳諧は『鶉衣』にみられる世俗に通じた軽妙さが特徴。その言語能力は天下一品。まぎれもなく天賦の才であろう。それを示す逸話がやはり『人物編』にある。

家老の成瀬正太が也有を呼び、「子俳諧を好むと、夫れ俳諧は風流隠者の為す所なり。子今壮にして国の重職たり。末技に耽りて心思を労するは、職に忠なる所以に非ず。願はくは之を廃せよと。」つまり俳諧のような遊びに頭を使わず国事に励めと意見した。

也有は「小子俳諧を嗜むも敢て之に耽りて心思を労し、為めに職責を缺くが如き事あらず。請ふ意を安んぜよと。」俳諧を好んでもそれに心をうばわれて職務を疎かにはしていない。心配めさるなと答えた。

正太は、本当にその言葉通りならば即座に賛を書けと、「一紙を出す。也有披いて之を見るに美姫を画く。尚ほ之を展ぶるに後に悪鬼を画けり。即ち筆を下して、姫もありまた鬼もあり百合の花と書す。正太其敏才に感嘆して、復た諫止せず。」

つまりその軸には美姫が描かれていたが、拡げると鬼も画かれていた。也有は苦もなく、**「姫もありまた鬼もあり百合の花」**と賛を書き入れ、正太は感心して以後諫言をやめたという話である。実はこの話、『諸家雑談二』にも嘉永二年己酉夏所聞として、「在勤の時、同列の人々、翁（也有）の俗事にうとく劣才ならんとおもひ、その才を試みん」と試したという話になっている。さてどちらが元になったのだろう。

宗春は在職九年目、四十三歳の元文四年（一七三九）に謹慎、名古屋で幽閉生活が始まる。一方の也有は八代藩主宗勝に重用され、延享元年（一七四四）には寺社奉行に転役して活躍し、宝暦四年（一七五四）五十三歳で職を辞して前津の別荘に移る。その同じ年、五十九歳となった宗春は御下屋敷に幽閉処を移され、明和元年（一七六四）に六十九歳で死去。前津に隠遁した也有は風雅の余生を楽しんで、天明三年（一七八三）に八十二歳で亡くなった。

ほぼ同じ時代を異なる人生を歩んだ也有と宗春。どちらかの人生を選ぶとしたら、さてどちら？

*山本祐子「新出・横井也有自筆『鶉衣』をはじめとする也有書写本について」『名古屋市博物館研究紀要』三五（二〇一二）

（調査研究員　松村冬樹）

表紙：尾陽戴公御家訓（温知政要）（びようたいこうごかくん・おんちせいよう）　一冊　　29.1×21.2㎝（表紙）

# 尾陽戴公御家訓（温知政要）

## 江戸時代（十八～十九世紀）写

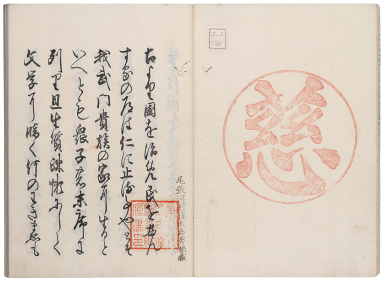
表紙は、庶民を「慈（いつく）」しみ、為政者としてのわがままを「忍（しの）」ぶことが肝要と説いた尾張徳川家七代宗春の信条を描いた軸を掛けた床の図である。太陽を背景に「慈」が、月を背景に「忍」が描かれている。宗春は享保二十年（一七三五）、名古屋城二之丸御殿内に「慈忍の間」を設けたことが記録されており、この図はその様子を示していると推定される。

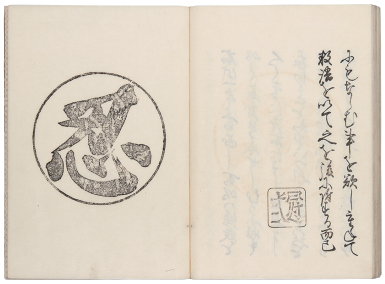
この図を収録した本書の標題には「尾陽戴公」こと八代宗勝（むねかつ）の家訓とあるが、内容は宗春が著した『温知政要』の写本である。『温知政要』は、藩主就任にあたって宗春が政治理念や施政方針を二十一ヶ条にまとめたもので、享保十六年（一七三一）に完成し、印刷されて藩士たちに配布された。現在では版本よりも写本として伝わっているものが圧倒的に多い。

『温知政要』の版本の巻頭と巻末には、丸で囲んだ朱書の「慈」と墨書の「忍」が大きく印刷されていて、この二字をそのまま写した写本も数多くある。本書にこの二字はなく、一方慈忍の間の図を収録した写本は他に例がない。

『温知政要』の内容は、規制・緊縮を推し進める吉宗の改革政治への批判書である。宗春の失脚とともに禁書となり、多くが廃棄された。尾張徳川家歴代の蔵書や伝記・年譜を伝える蓬左文庫も所用の品々や資料を伝える徳川美術館、徳川林政史研究所も藩政期から伝来する『温知政要』の版本は所蔵していない。所蔵の版本はいずれも旧尾張藩士からの近代以降の寄贈書であり、本書も含め写本は後に藩政記録編纂のために収集されたものである。

標題の誤りも、「慈」「忍」の文字を欠くのも本書が世を憚って伝えられたことの証なのかもしれない。





温知政要　享保16年（1731）刊
1冊 名古屋市鶴舞中央図書館蔵
名古屋を代表する学者の家「河村家」に伝来した宗春から送られたであろう『温知政要』。河村家出身の秀根は古代史研究で全国に知られた学者で、11歳で宗春に仕え、最後まで晩年の宗春に仕えた。

# 蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

## 交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

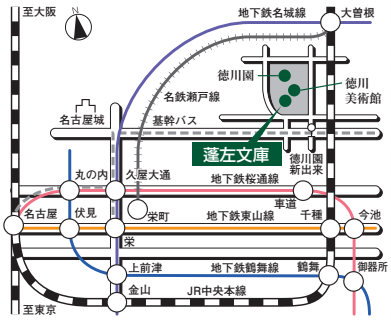
【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行
【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分
【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分
【JR】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。




## ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）　5月7日㈬は展示室のみ臨時開館します。
12月15日㈪～1月3日㈯　※催事により変更することがあります。

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）
【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）　8月8日㈮～10日㈰午後7時まで延長開館（入室は午後6時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第88号　☆平成26年3月31日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）
※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。